意欲を持続させる継続的な栽培活動の在り方についての一考察

奥村一将
（愛知教育大学大学院　教育学研究科）

A Consideration about continuous Cultivation Activities for increasing Motivation

Kazumasa OKUMURA
(Graduate Student, Aichi University of Education)

Ⅰ　研究の目的

本研究の先行研究「栽培活動における意欲の高め方についての一考察」[1]では、文献調査を基に、生活科における自ら学ぶ意欲を育むための直接的な要素を、「成就感」と「受容感」の二つに大別した。

「成就感」は、「自己像または学ぶ対象や内容」にこだわりをもって、物事を達成したという成果や、できるようになっていく経験など自身の成長の実感を通して得る感覚である。「受容感」は、「人間関係」にこだわりをもって、自らの個性が受け入れられ、自分の成長が周囲によって支えられているという実感を通して生まれる感覚である。子どもの思いや願い、そして他者とのかかわりを大切にする生活科においては、この「成就感」と「受容感」の両者の意欲によって、児童の学びが支えられていると考えた。

また、平成20年1月17日に中央教育審議会から出された答申、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」において、学力の重要な要素である学習意欲やねばり強く課題に取り組む態度自体に個人差が広がっているといった課題をPISA調査の結果から指摘し、自分に対する自信の欠如を学習意欲が高まらないことの一因として挙げている[2]。このことから、児童の学習意欲を高めることは、学校教育全体における今日的な課題であるといえる。

生活科の究極的な目標は、「学習上の自立」「生活上の自立」「精神的な自立」という3本の柱からなる自立への基礎を養うことである。小学校学習指導要領解説生活編では、「学習上の自立」を、「自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで表現できるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できる」[3]と定義し、「精神的な自立」を「自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、自ら前向きに生活することができる」[4]と定義している。学習の価値を自ら見出して前向きに生活することを目標とする生活科は、学習意欲を向上させる働きかけを特に重要視している教科であると捉えることができる。

生活科の中で自立への基礎を養うことによって、他学年や他教科での学習においても、自らが学習の価値を見出しながら意欲的に学習する姿が期待できる。よって、児童の学習意欲の高まりを意識しながら生活科の授業を展開していくことが、学校教育全体において大きな価値のあるものになると考えられる。

先行研究として平成21年6～7月に行った生活科における児童の関心・意欲についての実態調査の結果から、植物の栽培活動については「関心」を持たせやすいと感じている教師が多いが、「意欲」は持続させにくいと感じている教師も多いことが分かった。[5]

また、平成20年学習指導要領改訂では、

生命の尊さを実感を通して学ぶという観点から、生活科の内容(7)「動植物の飼育・栽培」の取扱いにおいて「継続的な飼育,栽培活動を行うようにすること」[6]の文言が加えられた。

これらのことから、栽培活動は長期にわたる単元構成が必要とされ、長期的な活動であるが故に、栽培活動は一時的な「関心」は持たせやすいが、長期的な「意欲」は持続させにくいと教師が認識しているという調査結果につながったことが推測できる。

この実態を踏まえ、児童の学習意欲を高めるために、「成就感」と「受容感」を育むことを意識して長期にわたる栽培活動の授業実践を刈谷市立F小学校第2学年で行った。

本論文では、まず活動前の児童への実態調査を踏まえ、「成就感」と「受容感」を育むことを意識した実践の様子を記す。その後、前期(夏野菜の栽培)の活動と後期(冬野菜の栽培)の活動を比較し、アンケート結果及び、児童の様子から、意欲を持続させる継続的な栽培活動の在り方について考察する。

Ⅱ　授業実践とその分析

刈谷市立F小学校第2学年1組A教諭の授業に補助教員として筆者が参加した。自身の成長を通して得る意欲である「成就感」と、自分の成長が周囲によって支えられているという「受容感」を育むことを意識して栽培活動の授業を組み立てた。

1　実践の概要

授業実践の概要は表1に示す。

表1　授業実践の概要

月	主な活動　成成就感を得る活動　受受容感を得る活動
	「やさいをそだてよう！」(全40時間＋随時＋課外)
4	どんな野菜を作ろう　(2時間) 成　野菜に関する絵本の読み聞かせを聞く。 成　ミニトマト、ナス、ピーマンの中から育てる野菜を選び、どんな野菜になってほしいか考え、育った野菜を想像して絵を描く。
5	野菜の苗植えをしよう　(4時間) 受　野菜の達人に教わりながら一人一鉢ずつ苗を植え、これからの世話の仕方について、教えてもらう。 成　植えた苗を見ながら、野菜に名前をつける。 受　4～5人のグループごとに、トマト、キュウリ、サツマイモ、ラッカセイの四種の野菜を畑に植え、グループでそれぞれの野菜に名前をつける。
6	野菜のお世話をしよう　(6時間＋随時) 成　視点・観点のアイコンを設定した観察カードを活用し、生長の様子を観察する。 成　教室に置いてある野菜に関する本を活用し、気になることや困ったこと等を調べる。 受　クラスで世話の仕方について伝え合う。 受　学年共有のスペースに掲示板を設け、野菜をおいしく育てるコツについて付箋に書いて野菜の種類ごとに貼る。
7	収穫祭の計画をしよう　(4時間) 受　グループで、収穫した野菜を食べる場所や方法を計画する。 受　クラス全体で、収穫した野菜を食べる場所を決定する。

野菜の達人にお礼の手紙を書こう(2時間)
成・受　野菜の世話の仕方を教えてくれた、農協の方や、畑を耕してくれたTTの先生にお礼の手紙を書く。

(収穫祭の計画をしよう　続き)
成・受　グループで、収穫祭で発表する野菜の出し物について計画し、練習する。

夏の収穫祭をしよう　(3時間)
成・受　屋外で育てた野菜を調理して食べる。
成・受　グループで、野菜に関する出し物を発表し合う。

9

冬野菜を育てる準備をしよう
(1時間＋課外)
成　ダイコンとラディッシュがどのように育ってほしいか、絵や文章で表現する。
受　冬野菜の種を買うために、それぞれのお家の人のお手伝いをしておこづかいをもらう。

ラッカセイを収穫しよう(2時間)
成・受　ラッカセイを収穫し、収穫の喜びや感動を分かち合いながら食べる。

冬野菜の種まきをしよう　(3時間)
成　土の量や、植える間隔などをそれぞれ工夫して、鉢にラディッシュの種を植える。
成・受　ダイコンの育て方についての話し合いを基に、畑で畝作りを行い、ダイコンの種を植える。

10

冬野菜のお世話をしよう　(4時間＋随時)
成・受　近くにあるダイコン畑の様子に目を向けながら、間引き等お世話の仕方を考える。
受　学級便りを通して、教師から各家庭に栽培活動の様子を伝える。
成・受　一度目のラディッシュの収穫を行い、ラディッシュの育て方についての話し合いをした後、二度目のラディッシュの種まきを行う

11

サツマイモを収穫しよう
(3時間＋課外)
成　自分で作って食べたいサツマイモ料理を考える。
成・受　グループで協力してサツマイモ料理を作って食べる。

12
1

心をこめて、ダイコンさんの絵手紙を書こう　(4時間)
成・受　ダイコンを収穫した後、自分で育てたダイコンを題材にして、心をこめた絵手紙を書く。

2

ダイコンパーティーをしよう　(2時間)
成・受　今までの活動で学んできたことを基に、児童が主体的にダイコンパーティーの計画を行い、みんなで収穫の喜びや感動を分かち合いながら食べる。

3

2　実践の様子

(1)夏栽培の様子の概略

野菜に関する絵本の読み聞かせを行い、児童が栽培に対する関心をもった後、鉢で育てる野菜をミニトマト、ナス、ピーマンの中から選び、どのような野菜になってほしいか、児童一人一人が自分なりの思いを絵や文で表現した。また、児童間の「受容感」を育むことをねらい、４～５人のグループで畑にトマト、キュウリ、サツマイモ、ラッカセイの４種の野菜の苗を畑に植えた。ゲストティーチャーとの関わりやグループ活動等を通して「受容感」が育くまれ、学級文庫や観察カード、学年共有の掲示板などを工夫して活用することで「成就感」が育まれる姿が見られた。

また、野外で収穫祭を行う場面では、児童が主体的に火起こしや調理を行った。共に野菜を育てた仲間と楽しそうに食べる様子や、栽培を支援した教師やゲストティーチャーに調理した野菜を自ら渡し、「ここで一緒に食べて」と呼びかける児童の行動から、「受容感」が十分に高まっている様子が見取れた。また、各グループで考えた野菜に関する出し物を発表し合う場面では、自分たちが主体的に育てた野菜を、自分たちが表現したい方法で生き生きと発表する様子からそれぞれの児童の「成就感」が高まっている様子も見取ることができた。

４月から７月までの実践の様子の詳細ついては、愛知教育大学教育創造開発機構紀要 vol.1 73-81 頁「学習意欲を高める授業の工夫についての研究」[7]に示す。

(2)冬栽培の様子

７月の収穫祭後に、次はどのような野菜を育てたいかアンケートを取ると、ダイコンの栽培を希望する児童が最も多かった。また、児童が栽培活動を行う畑の隣には地域の人が所有している広大なダイコン畑があるため、学習環境としてもダイコンを栽培することに適していると考えられる。前期の活動では、栽培を失敗したという経験が原因となり、意欲が低下してしまった児童がいた。栽培活動は、基本的に長期にわたる活動が必要とされるため、生活科の活動の中でも容易にやり直しができないという特有の課題を含んでいる。その課題を踏まえ、通常のダイコンの種を植える前に、短期間で育つラディッシュ(別名：二十日大根)の種を植えることで、児童はラディッシュの栽培という先行経験を基に、通常のダイコンの栽培に取り組むことができる。子どもの関心や活動を行う環境、そして教材としての価値から、後期はすべての児童がダイコン、ラディッシュの二種類を育てることにした。

① 冬野菜を育てる準備をしよう

前期の活動では、「野菜の達人」から苗をプレゼントとして頂いたが、後期の活動では、自分たちで用意しなければならないことと、種は一人当たり 20 円で買うことができることを児童に伝えた。どうやって種を買うかについての話し合いで、「お母さんのお手伝いをしてお金をもらいたい。」という児童の発言を取り上げ、それぞれの家庭で手伝いをして 20 円ずつ用意するように促した。

一週間後には、皿洗い、マッサージ、ゴミ捨て、風呂掃除など、各児童がそれぞれ自分でできる範囲の手伝いを考えて行ってきた。保護者の方からのコメントでは、「すすんでお手伝いをしてくれてうれしかったです。おいしいラディッシュとだいこんがそだってくれるといいね。」など、保護者の方に、手伝いに対する感謝の気持ちや、児童の野菜栽培への関心が表れている記述が多く見られた。種を買うために手伝いをするという活動を通して、児童の中で、家族に対する「受容感」が生まれ、この「受容感」に支えられながら、後期の栽培活動に取り組もうとする姿が見られた。

② 野菜の種まきをしよう

前期にミニトマト、ナス、ピーマンを育て

た鉢の中の土と、学内にある腐葉土を用いて、子どもたちが自分自身の手で一人一鉢ずつラディッシュを育てるための土を作った(図1)。 多くの児童は、種をまく前に自分なりに調べて来ていたが、土の量や種を植える数、植える間隔等は、児童によってさまざまであった。間隔を空けず、指で空けた一つの小さな穴に複数の種を植える児童がいたが、「種がきゅうくつじゃないかな？」という教師の問いかけに対して、「間引きをするから大丈夫」と答えたことから、児童が自分なりの考えを基に種まきを行っている様子が見とれた。教師が植え方のすべてを教えるのではなく、児童が自分なりの考えを基に種まきを行うことで活動により主体性が生じるため、以降の活動でより確かな「成就感」を得る姿が期待できる。

図１　ラディッシュの土作りを行う様子

ラディッシュの種まきを行った一週間後、ダイコンの種まき、育て方についての話し合いをする前に、ラディッシュの芽がどれだけ出てきたかを児童に尋ねた。三つ種を植えて二つ芽が出た児童、二つ種を植えて一つだけ芽が出た児童などがいた。野菜の種の発芽率は 100%ではないため、基本的には一度に複数の種をまき、間引きをする必要がある。そのことについて、子どもたちが体験を通して気付きを得たため、ダイコンの種植えでは、全ての児童が複数の種を植えることになった。

ダイコンを栽培するために、畝づくりは児童自身の手で行った(図２)。児童は、ダイコンが大きく育つように、スコップで土を深く掘った後で、土を積み上げて畝を作った。「○○ちゃんと友達だからつなげて作る」と言い、自主的に隣で栽培する児童と畝を繋げて作る児童や、一人で誰よりも高い畝を作ろうと努力する児童などがおり、それぞれの活動の様子に、友達との「受容感」や、栽培への「成就感」を得ている姿が表れていた。

図２　ダイコンの畝作りを行う様子

③冬野菜のお世話をしよう

児童がダイコンの種を植えた畑の隣には、地域の人が所有している広大なダイコン畑があり、本単元の導入時からその畑の存在を児童に気付かせるように促している。その畑では、児童がダイコンの種を蒔く時期がほぼ同時期であったこともあり、児童はその畑で間引きが行われたのを確認すると、「自分のも間引きしないと！」という思いを抱き、自分が育てているダイコンの間引きを行った。

冬野菜の世話をする時間として、授業内で間引きを行うことができる時間を設けたが、芽の位置が離れているため等の理由で、間引きをしない児童が何名かいた。また、間引きを行った児童の中でも、一番大きな芽を残して間引きする児童や、小さくても畝の中で一番高い位置にある芽を残す児童などもいた。これらの児童の様子からそれぞれが自分なりの考えを基に世話を行うことができたと考えられる。教師などの指導を基に世話を行うのではなく、児童が主体的に世話を行って

いる様子から、より確かな「成就感」が育まれているように感じた。

学級便りを通して野菜の成長や児童の活動の様子を教師から保護者の方へ複数回に渡って知らせた。学級便りには、活動の様子の写真だけでなく、児童の日記なども添えて載せた(図３)。野菜がかなり大きく成長した頃に、「まだ収穫しないのってお母さんに言われた」とダイコン収穫への思いを教師に訴えてくる児童が表れ、児童の栽培活動への関心が高い保護者が存在することがわかった。保護者の栽培活動への関心が高まることによって、児童の中で収穫への思いが強まっている姿から、保護者からの「受容感」が栽培活動の確かな支えになっていることがわかった。

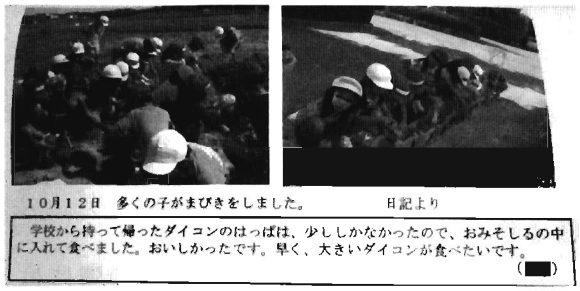

図３　保護者へ向けた学級便りの一部

一度目のラディッシュの収穫を全員が行った後、二度目のラディッシュの種を植える前に、クラスでラディッシュのお世話について話し合った。ラディッシュが大きく育たなかった児童からは、「水をやらなかった」「土が少なかった」「土をぎゅうぎゅうにしたから」などの正直な反省が出た。ラディッシュが大きく育たなかった児童の一人が、一つの鉢で三つのラディッシュを育てたことを発言すると、他の児童から「栄養を取り合いするから育たなかったんじゃない？」という発言があり、クラス全体で、間引きの必要性を再認識することができた。ラディッシュを大きく育てた児童が、育て方を発言すると、自主的にノートを取り出してメモを取る児童がいた。また、話し合いの終盤では、ラディッシュが大きく育たなかったある児童が、ラディッシュを大きく育てた児童に対して、『先輩』と呼び、「○○先輩に質問です！日なたか、日かげ、どっちに(鉢を)置いてたのですか？」と質問していた。これらの様子から、一人一鉢ずつ育てる栽培活動であっても、児童の間で「受容感」が十分に育まれることがわかった。

④ラッカセイを収穫しよう

９月の中旬に春に植えたラッカセイの収穫を行った(図４)。小さなラッカセイも残さず収穫し、丁寧に何度も何度も水洗いをする児童の様子から、ラッカセイを大切に育てる活動を通して、「成就感」が十分に育っている様子が伺えた。

湯掻いたラッカセイを給食の時間にみんなで食べる場面では、「おいしい！」「すっごく大きい！」などの感動の声が到る所で上がりお互いに感動を分かち合っていた。また、「家族に持って帰ってあげたい」とラッカセイを持ち帰る児童も多数いたことから、家族に対する「受容感」が表れている様子も見取ることができた。

図４　ラッカセイを収穫する様子

⑤サツマイモを収穫しよう

11月中旬のある日、２時間目にサツマイモを収穫する予定だったが、雨のため収穫することができなかった。収穫の時を心待ちにしていた子どもたちは、延期の話を聞くと、「えー！行きたーい！」と不満の声も多く出たが、天候次第では５時間目に収穫を行うことを伝えると落ち着きを取り戻した。天候は次第

に回復し、休み時間も給食の時間も、児童は窓の外を見ながら「早く５時間目にならないかな」と、期待を高めていた。５時間目に天気が回復すると、児童は大喜びでサツマイモの収穫に取り掛かる姿から、５月からの長期的な活動により、大きな「成就感」が育まれている様子が伺えた。

また、児童が協力してツルを抜く姿や、偶然通りかかった地域の人に「両手で無理に(サツマイモを)抜くと折れちゃうよ」というアドバイスを頂き、丁寧にサツマイモを取り出す姿などから、「受容感」が得られている様子も見取ることができた(図５)。

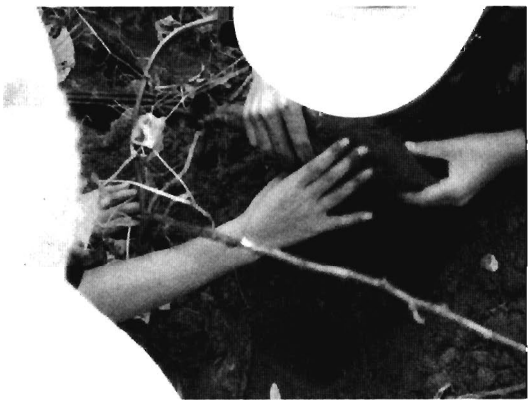

図５　サツマイモを収穫する様子

児童が調べてきた料理の中でも、特に人気の高かった、茶きんしぼり、スイートポテト、バター焼きを家庭科室で作ることになった。共に育てたグループごとに、協力し合いながら２時間の内に３品を作った。調理中には、「ちゃきんしぼりってこうでいいの？」「そう！そんな感じ！」と友達と教え合ったり、「おいしいそう！」「早く食べたい！」と調理中から完成への期待で胸を膨らませたりする様子から、「受容感」や「成就感」が育っていることがわかった。

⑥心をこめて、ダイコンさんの絵手紙を書こう

１月下旬、ダイコンの収穫を行った。児童一人一人が、ダイコンの周りの土をかき分け丁寧に時間をかけて収穫した。

収穫したその日に、収穫したときの思いを書きとめるために、ダイコンの絵手紙を書いた。児童の栽培の思いは、それぞれ異なっていると考えられるため、絵手紙の宛先については児童に自由に決めさせることにした。自分が育てたダイコン宛てに書く児童をはじめ、母親、父親、兄弟等の家族宛てに書く児童も多くおり、それぞれの絵手紙に喜びや感謝の気持ちが素直に表れていた。活動を振り返る中で、児童が得た「成就感」や「受容感」を素直に実感できたことから、絵手紙の宛先を児童自身に決めさせる手立ては、「成就感」や「受容感」を得るために適切であったと考えられる。

⑦ダイコンパーティーをしよう

今回の冬実践では、多くの児童が家族の事を思いながら栽培活動に取り組んでいたため、児童自身が育てたダイコンはもち帰り、各自の家庭で食べることにした。

３月の上旬に、実家の畑で多くのダイコンを育てているＦ小学校のある教師から、２年１組へダイコンのプレゼントを頂いたため、ダイコンパーティーを行うことになった。他の単元との時間の兼ね合いで、準備に時間をとることができなかったが、限られた時間の中で、児童が主体的に休み時間などを使って、ダイコンをたくさん入れたおでんを作るという、ダイコンパーティーの計画を行った。

ダイコンパーティーでは、初めに料理の説明を担当しているグループが、おでんの作り方を丁寧に説明して料理に取り掛かった。また、おでんを煮る時間を使って、企画を担当しているグループが考えてきた野菜クイズを行い、クラス全員で楽しんだ。夏野菜の収穫祭を行う時や、サツマイモ料理を作る時に比べ準備に掛けられる時間が少なかったにもかかわらず、児童が主体的に立派なパーティーを運営している姿から、「成就感」や「受容感」を得ながら一年間を通して活動をする中で、主体的に活動を行う力が確かに培われていることがわかった。

3　成果と課題

1)　アンケート調査より

夏野菜を収穫した後と冬野菜を収穫した後にそれぞれ簡単なアンケートをとった。「あなたは野菜が好きですか」というアンケート結果は図６、図７通りである。どちらの活動後も、「きらい」と回答した児童は０人であるが、冬実践後は夏実践後に比べて「どちらでもない」と答えた児童が24%減少した。ある児童は、夏実践後に「すきなものもあるけどきらいなものもある。」という理由で「どちらでもない」と回答したが、冬実践後には、「すき」と回答した上で、「自分が育てたやさいとかは、おいしいからです。」と理由を述べた。一年を通した栽培活動を「成就感」や「受容感」を育みながら経験したことで、自分自身が愛情を持って育てた野菜への認識が強まり、野菜そのものに対して良いイメージを持つように変容したと考えられる。

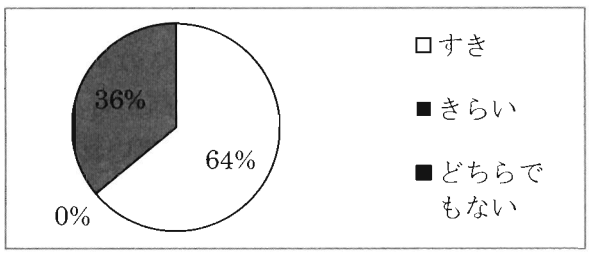

図６　野菜は好きか　【夏実践後】

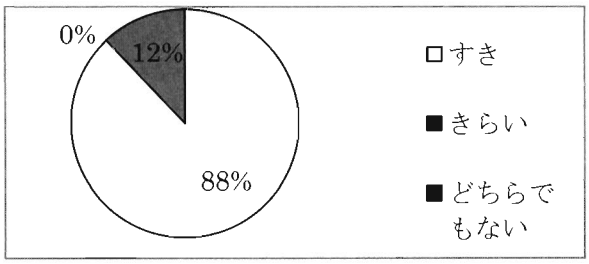

図７　野菜は好きか　【冬実践後】

「また野菜を育ててみたいですか。」というアンケート結果は、図８、図９に示す。冬実践後は夏実践後に比べて、「はい」と回答した児童が12%増加した。ある児童は、夏実践後に、「つかれるから」という理由で、「いいえ」と回答したが、冬実践後には、「つかれても、またいっぱいやさいの友達がふえるし、できるから。」という理由で「はい」と回答した。また、夏実践後には、主に「たいへんだから」という理由で20%の児童が「いいえ」と答えたが、冬実践後には「いいえ」と回答した児童が16%減少した。冬の栽培活動は夏の栽培活動に比べ、水やりが必要な回数が少なく、世話も容易であることから、「たいへん」と感じる児童が減少したため、このような結果になったと考えられる。

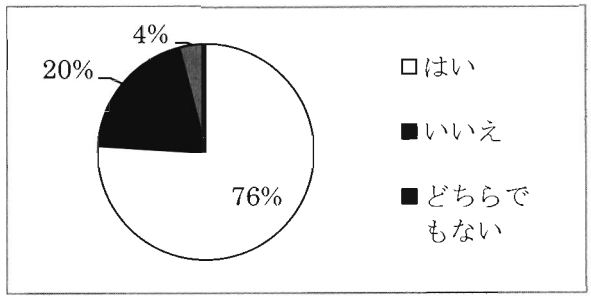

図８　また野菜を育ててみたいか【夏実践後】

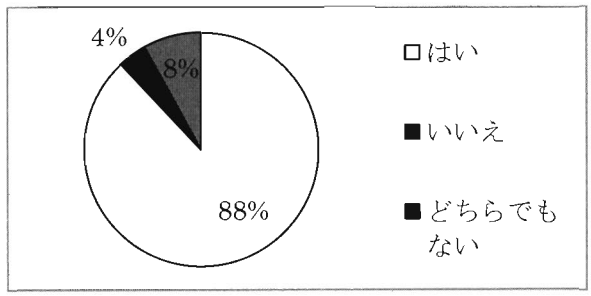

図９　また野菜を育ててみたいか【冬実践後】

2)　児童の様子より

ア　B児

B児の家庭には広大な畑があり、夏実践前に行った事前アンケートでの「野菜を育ててみたいですか。」という質問に対し、「うちでも作っているから」という理由で「どちらでもない」と回答した。しかし、生活科の栽培活動には、とても意欲的に世話を行い、夏実践後のアンケートでの「また野菜を育ててみたいですか。」という質問に対しは「はい」と回答した。

冬実践においても、B児の栽培意欲は衰えることなく、ダイコンに対してもラディッシュに対しても自発的に世話を行った。B児は一度目のラディッシュの栽培から、立派なラディッシュを育てたのにも関わらず、二度目のラディッシュの種を植える前に行ったク

ラスでの話し合いでは、他の児童の意見を忘れないように、自分自身の掌に一生懸命に栽培のコツを書き込んだ(図 10)。B児にとっては、野菜を収穫することだけが目的ではなく、自分自身が野菜をより上手に育てるようになることが目的となっているため、「成就感」が非常に高まっていることがわかった。

図 10　B児が掌に書いたメモ

イ　C児

C児は夏実践後のアンケートの、「また野菜を育ててみたいですか」という質問に対し、「ミニトマトの苗を育てるのを失敗したから」という理由で、「いいえ」と回答した。

ダイコンの畝づくりをする場面では、C児が種を植えるスペースの土に大量の水を入れてかき混ぜていた。周りの児童が「大丈夫なの？」と心配そうに声を掛けてもC児は水を入れ続けていた。そこで教師が「それはダイコンのためにやっているの？Cちゃんのためにやっているの？」と言葉掛けを行うと、C児はしばらく考えたあと、「ダイコンのためでもある。」と答えた。水を入れることはやめたが、その場で座ったままのC児に対して、「ダイコンの種がおぼれちゃうかも知れないから、一緒に土を入れようか？」と教師が声を掛けると、C児は納得し、土を教師と共に土を入れ始めた。

図 11 のC児が書いたダイコンの絵手紙では、願いを込めてダイコンを育て、願いどおりに育ったダイコンに対して感謝している様子を読み取ることができる。

児童が主体の活動になることを念頭に置きながらも、児童が突発的にやりたいことをそのままやらせるのではなく、最終的に栽培活動を成功させて確かな「成就感」を得させるために、児童がしっかりと対象に向き合わうことができるように教師が支援する必要があると考えられる。

大子へ

大きくそだってくれてありがとう。わたしのねがいどおりになりました。大子は大きい子になりますようにというねがいでした。そのねがいかなえてくれてありがとう。たべられてからもわすれないで。大子は1番はじめにできたこどもだから。今までありがとう。さようなら。　　C児より

図 11　C児が書いた絵手紙

ウ　D児

D児は、夏実践前に行った事前アンケートでの「野菜を育ててみたいですか。」という質問に対し、「いもうとがやさいがきらいだから、すきになってもらいたい」という理由で、「はい」と答えた。

二度目のラディッシュの種を植える前に行ったクラスでの話し合いにおいて、一度目の栽培で大きなラディッシュを育てたD児は、「野菜嫌いの妹のために、頑張って水をあげた」と発言したことから、『妹のため』というD児独自の「受容感」が栽培活動への意欲を支え続けてきたことがわかった。

また、このD児の発言に対し、C児が興奮をしながら「それはめちゃめちゃ愛情をこめて育てたってことだよ！」と反応していた。

話し合いの場で出た、D児独自の「受容感」を含んだ発言が、他の児童へと広がり、児童間での「受容感」が生まれる様子をみとることができた。

3) 夏栽培と冬栽培との比較

一年間にわたって児童の栽培活動を観察する中で、夏野菜の栽培と冬野菜の栽培では、それぞれに利点と注意点が存在することが明らかになった。夏野菜栽培と冬野菜栽培それぞれの活動の利点と注意点について簡単にまとめたものを表２に示す。

表２　栽培活動の利点と注意点

	夏野菜	冬野菜
利点	・栽培に対する切実感が大きい ・対象の変化が大きい	・世話に手間がかからない ・失敗しにくい
注意点	・世話に手間がかかる ・失敗しやすい	・栽培に対する切実感が欠如しやすい

まず、夏野菜については、芽かき、支柱立てなどが必要な野菜が多い上に、病気にかかりやすい野菜も多く、毎日の水やりが必須であるため、世話に手間がかかるが、その反面、児童は栽培に対する切実感を自然に持ち続けることができる。また、花が咲く、実がつくなどの大きな変化があり、児童の中で気付きが生まれやすいことも利点として挙げられる。

冬野菜については、夏野菜に対して水やりをしなければならない回数が少なく、病気にもかかりにくいことから、世話が容易であり、成功体験をしやすいことが大きな利点として挙げられる。しかし、世話をしなくても野菜が育ってしまうため、栽培に対する切実感を持ちにくいことが挙げられる。

本稿で示した冬実践では、栽培活動の導入時に手伝いをして種を買うお金を手に入れる手立てを講じたり、学級通信を通して保護者に活動の様子を伝えたりするなど、児童の中で家族との「受容感」が生まれることを教師が意識して活動を展開した。児童は冬野菜の栽培への意欲を持ち続けることができたのは、家族との「受容感」に支えられていたことが大きな要素であったことが児童の様子から見取ることができた。このことから栽培に対する切実感が欠如しやすい冬野菜においては、他者からの「受容感」で意識した単元構成が特に必要であると考えられる。

Ⅲ　まとめ

本研究では、世話に手間がかからないため、対象への切実感が欠如しやすい冬野菜の栽培において、家族をはじめとする他者との「受容感」を特に意識して授業を展開することで、活動の後期にあたる冬野菜の栽培活動においても多くの児童の意欲を持続させることができることがわかった。

今回参加した授業では、保護者が協力的であったことや、近くに地域の人のダイコン畑があったことなど、恵まれた環境を生かして実践を行うことができたが、他の環境であっても「成就感」と「受容感」の視点を持つことで、意欲を持続させる継続的な栽培活動を行うことができると考える。

【引用・参考文献】

1）奥村一将「栽培活動における意欲の高め方についての一考察」,愛知教育大学生活科教育講座紀要『生活科・総合的学習研究』 第８号　2010年　119-128頁

2）中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」　2008年１月

3）文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」2008年　13頁

4）上掲書 3)　13頁

5）上掲書 1)　119-128頁

6）上掲書 3)　7頁

7）奥村一将「学習意欲を高める授業の工夫についての研究 - 生活科『なつやさいをそだてよう！』の実践を通して - 」,愛知教育大学教育創造開発機構紀要 vol.1　2011年　73-81頁